

町田三郎先生の思い出

有馬, 卓也
広島大学

<https://doi.org/10.15017/2230701>

出版情報：中国哲学論集. 44, pp.61-77, 2018-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

町田三郎先生の思い出

有馬卓也

私が九州大学の中国哲学史研究室に在籍しておりましたのが昭和五十七年四月から平成三年九月まででしたので、ちょうど町田三郎先生が五十代の、一番研究に脂の乗っておられた時期の九年半だったように思います。荒木見悟先生が定年退官されたのが同じ昭和五十七年三月でしたから、当時教養部におられた福田殖先生のサポートはありましたが、平成元年四月に柴田篤先生が着任されるまで、実に七年にわたりお一人で中国哲学史研究室を運営してこられた、ちょうどその時期になります。

昭和五十七年、地元の鹿児島大学法文学部の卒業を三月にひかえた私は、二月の九州大学の大学院受験に失敗し、三月の中旬に研究生の申請書に印をいただきに先生の研究室を訪れたのが、最初の町田先生の印象です。もちろん、大学院入試の面接の時にお会いしているのですが、緊張していて何も覚えておりません。先生から入試の時の成績を伝えられ、「一年間頑張ってみなさい」と言われました。ほのかに「一年やってみてだめだったらあきらめなさい」とも言われ、先生が私の決意に火をつけた、そんな第一印象でした。

先生はお昼の十二時二十分頃から三十分間ほど、毎日学生研究室に降りて来られ、我々学生と雑談をされました。その時は必ずコーヒーを飲まれ、在籍中の九年半は私がドリッブ式のコーヒーを入れておりました。毎回の授業もさることながら、私にとってはこの毎日の三十分がとても大切に貴重な時間でした。話題は特に決まっておらず、どんな話題でも、誰が切り出しても、先生は必ず乗ってくださいました。

町田先生とコーヒータムを楽しみむつもりで、先生と思い出を語りたいたいと思います。
なお、以降の写真は昭和六十二年の中国旅行の時のものを、コース順に配列したものです。



1. 万里の長城にて



2. 故宮にて

研究と授業

先生のご研究は主著『秦漢思想史の研究』（昭和六十年、創文社）に代表されるように、戦国末期から漢代へと至る思想史がメインでしたが、とりわけ政治的・経済的な歴史方面への関心が強かったように思います。というのでも、講義はもっぱら『漢書』『後漢書』を先生ご自身が読みながら解説を加えるというものが多く、『管子』軽重グループや『塩鉄論』散不足へ言及されることが多く、どのような情勢の下にどのような思想が生まれるのかを伝えられ、私の中にもそれが強く印象づけられているからに他なりません。

先生ご自身の研究としては、『秦漢思想史の研究』を出版された後、昭和六十二年に「後漢思想研究のための序」（『東方学会創立四〇周年記念 東方学論集』）を発表され、この後先生は後漢思想史へと研究を進めていかれるもの

とっておりましたが、先生はその後日本漢学の方へ研究をシフトされ、それを本格化されていきました。ただ、授業の方で日本漢学を扱われたことはありませんでした。

大学院の演習では連続して十三経注疏の札を読んでおられました。私が在籍していた当時は、最初の四年ほどが『礼記』で、後の五年は『周礼』でした。常々「自分の専門が何であれ、十三経のうち二つはマスターしておくように」と言っておられました。

学部の演習は毎年テキストを変え、『潜夫論』『孔子家語』『大戴礼』『論衡』『管子』などが記憶に残っています。冒頭から読み進めるものもあれば、先生がテーマを決めてセレクトされた数篇を読んでいくこともありました。後者ですと、『論衡』の問孔・非韓・刺孟の三篇、『管子』の心術（上下）・白心・内業の四篇などです。

大学院でも学部でも、担当者はひたすら調べてきた内容を発表するわけですが、こちらがミスをしなければ先生はずっと黙って聞いておられました。開始時間になると「ぼちぼち始めますかな」とおっしゃって、メガネを額の上に向けて「はい、どうぞ」の一声で担当者の発表がスタートします。当時私は「無声の演習」というものをめざしておりまして、先生に一言も訂正されない発表をめざしていたのですが、これがなかなか難しいものでした。

また課外に毎週『資治通鑑』を読んでおりました。毎回一人一卷をひたすら書き下すというもので、半期に二回ほど当たるのですが、予習がハードでした。私の中華書局版『資治通鑑』は巻四十一（漢紀・光武帝）から巻百十七（晋紀・安帝）までの内、合計二十六巻に書き込みがあります。

指導

学生の前では、他の研究者の批判は決してされませんでした。「○○先生は、いいんだよ」と必ずその研究者のよい所を示しておられました。また、論文を書いて結果として先行研究を否定することになるのはかまわないが、他の研究を否定・批判する形で論文を書いてはならないというのも何回か聞いたことがあります。

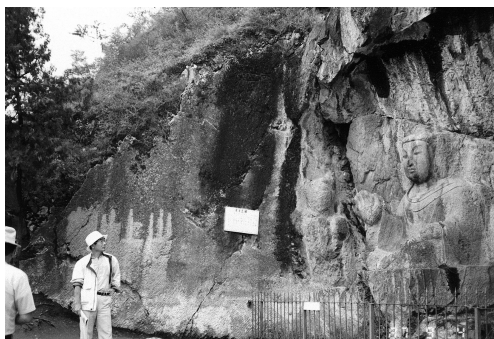
先生のご指導は、細かな添削というのではなく、全体をわしづかみにして、さらなる高みを示すというタイプでし

た。私事で恐縮ですが、もともと論文が堅苦しい文章になりがちだった私に、ある時「有馬君、もっとまろやかに仕上げるように」とアドバイスされ、「え、まろやかですか？」と伺い直し、「うん、そう。よろしくたのむよ」とおっしゃった事がありました。今ならよくわかるのですが、当時は「まろやかな論文」とはどのような論文なのかずいぶん悩んだ記憶があります。

先生がよく我々に語っておられたのが、研究職に就けたら、必ず地元の漢学者を研究しなさいということでした。これは地元でも忘れ去られ、埋もれてしまった漢学者たちの再生であり、「これはぼくらの仕事なんだ」と言っておられたのを覚えています。



3. 北京駅にて 洛陽行特急



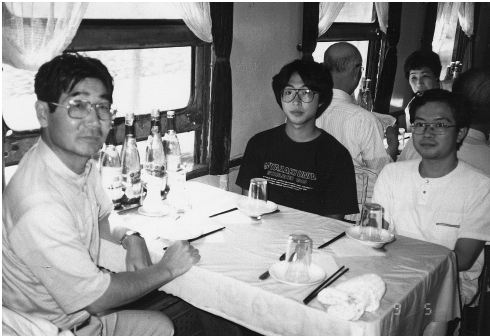
4. 龍門石窟にて

これについては後日談もあります。私が徳島大学に着任して二年目だったと思います。当時徳島大学教養部では、自分が担当する授業の一コマを他大学の先生の招待講演にあてることができるという制度があり、それを使って町田先生を徳島大学にお呼びしたことがありました。

その際、事前に町田先生が「徳島には岡本章庵という漢学者がいたんだ。著作がどこに残っているはずだから調べ」といわれ、県立図書館にそれが残っていることがわかり、招待講演終了後、先生を県立図書館へご案内し、先生と直筆写本を多数閲覧しました。現在の私の岡本章庵研究の原点がここにあることは言うまでもありません。もちろん先生も論文の中で岡本章庵に言及されることはありましたが、今思うと私のために道筋をつけてくださったのかもしれない。



5. 白馬寺にて



6. 西安行特急の食堂車

旅行

次に先生との旅行に話題を移したいと思います。

院生の頃、媽祖教の遺物を手掛かりに谷口明夫先生（元志学館大学）のご案内で薩南を巡ったこともありましたが、これは航海の安全をつかさどる媽祖信仰の像を祀った船が難破し、その像が鹿児島西岸に流れ着き、拾われた人々に媽祖信仰が伝播していったというものです。この時は、先生が学生のレポートにそのことが書いてあり、是非自分で確かめたいとのことでの調査旅行でした。夏休み前にそのことをお伺いした私は、予定の日がちょうど鹿児島に帰省中でしたので、「私も一緒にさせていただけいいですか」とお願いしてメンバーに加わりました。当日の朝、水筒にアイスコーヒーを二本準備して西鹿児島駅（現鹿児島中央駅）に行き、谷口先生の車で指宿から坊津・笠沙と巡りました。当時、媽祖信仰の何たるかも知らなかった私には非常に貴重な体験でした。この時、以降の媽祖廟見学に裨益する所は大きなものでありました。

この調査旅行は、或いは先生は論文にされるつもりだったのかもしれませんが、ところが、最後に訪れた民家で媽祖像を見せていただいた後に、その家の方から「本にも載せていただいているんですよ」と一冊の新書本をわたされ、それが学生のレポートのネタ本とわかり、先生が「やられた！」と一声もらされるといふオチがついています。

当時の町田先生は台湾との交流が中心で、大陸へはまだ足を運んでおられませんでした。そういうこともあって、昭和六十二年九月、雰囲気をつかもうと孤口治先生（当時福岡教育大学）・横山裕先生（現九州保健福祉大学）の四名で上海・北京・洛陽・西安の七泊八日のツアーに参加しました。この時は、他のツアー参加者とも仲良くなり、和氣藹々の中国旅行でした。

また平成三年の八月末から九月に、五名（町田・有馬・連・横山・横畑）で台湾へ行ったこともありましたが、この時は台北↓台中↓梨山↓花蓮↓台北という台湾の北部を回るコースで、六泊七日の旅でした。思い出深いのは梨山で笠征先生（福岡大学名誉教授）のご実家を訪問した際、宴会の席で町田先生が「乾杯の日本代表の有馬君です」

と会の初めに私を指名され、その後全員との乾杯を余儀なくされたことでしょうか。出席者全員と個別に乾杯をし、さらに高砂族にはお互いの口を付けて同時に一つの杯の酒を飲むという乾杯があり、笠先生のご兄弟の方とそれをしたのを覚えています。



7. 始皇帝陵にて



9. 華清池にて



8. 大雁塔にて

おわりに

毎年一月十五日は学生が町田先生のお宅にお邪魔して、奥様に準備していただいた手巻き寿司を食べながら、ラグビーだった先生の解説でラグビー観戦するのが恒例となっております。当時高校でラグビーをやっていた息子さん（太郎氏）と先生の意見が分かれることもあり、少しドキドキすることもありました。

先生がお亡くなりになった今もご家族の方々と親しくさせていただくことができるのも、先生が家族ぐるみで学生と接してくださったたまものと思います。

※

今回、この原稿の依頼を受けて、改めて町田先生のことを思い起こし、忘れていたことも次々と思い出しました。そして、今の自分にとって、町田先生の影響がいかに大きなものであったかを再認識した次第です。町田先生の五代と自分の今とを比較して、自分が町田先生の弟子として恥ずかしくない研究者であるか問い直すことができました。

悔やまれるのは就職した後、先生にお会いしたのが先の招待講演の時と、結婚の報告の時、広島大学に移る事が決まった時、移籍後一年たった時、台湾での国際学会で発表する前の五回に過ぎなかったということでしょうか。ただ、先生はいずれの時もまろやかに接してくださいました。感謝とともにご冥福をお祈りいたします。

話は尽きませんが、紙幅が尽きましたので、このへんで摺筆と致します。

町田三郎先生略年譜

- 昭和七年（一九三二）一月 出生（群馬県前橋市若宮町）
- 昭和二十三年（一九四八）四月 群馬県立前橋高等学校第二年に編入
- 昭和二十五年（一九五〇）三月 群馬県立前橋高等学校卒業
- 昭和二十五年（一九五〇）四月 東北大学文学部入学
- 昭和二十九年（一九五四）三月 東北大学文学部中国哲学科卒業
- 昭和三十年（一九五五）四月 東北大学大学院文学研究科入学
- 昭和三十二年（一九五七）三月 東北大学大学院文学研究科修士課程修了
- 昭和三十二年（一九五七）四月 日本中国学会会員
- 昭和三十五年（一九六〇）三月 東北大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学
- 昭和三十五年（一九六〇）四月 東北大学助手（川内分校）
- 昭和三十七年（一九六二）四月 東北大学講師（川内分校）
- 昭和三十八年（一九六三）四月 東北大学助手（文学部）
- 昭和三十九年（一九六四）四月 東北大学講師（教養部）
- 昭和四十一年（一九六六）四月 東北大学助教授（教養部）
- 昭和四十九年（一九七四）四月 九州大学助教授（文学部中国哲学史講座）
- 昭和五十年（一九七五）四月 九州中国学会会員
- 昭和五十年（一九七五）十月 研究誌『中国哲学論集』発刊
- 昭和五十六年（一九八一）七月 九州大学教授（文学部中国哲学史講座）
- 昭和五十七年（一九八二）十一月 文学博士の学位授与（東北大学）

- 昭和六十年(一九八五) 四月 日本道教学会会員、東方学会会員・評議員(平成十七年十二月まで)
- 昭和六十年(一九八五) 五月 九州中国学会会長(平成五年五月まで)
- 昭和六十年(一九八五) 六月 文部省短期在外研究員としてロンドン大学にて研究に従事(同年十月まで)
- 昭和六十一年(一九八六) 四月 日本中国学会評議員・理事(平成十四年三月まで)、日本道教学会評議員・理事
- 昭和六十三年(一九八八) 七月 九州大学評議員(平成三年三月まで)
- 平成 六年(一九九四) 一月 文部省学術審議会専門委員(平成七年一月まで)
- 平成 七年(一九九五) 三月 九州大学教授を定年により退官
- 平成 七年(一九九五) 四月 九州大学名誉教授
- 平成 七年(一九九五) 四月 純真女子短期大学教授(国文学科)
- 平成十二年(二〇〇〇) 二月 純真女子短期大学学長
- 平成十八年(二〇〇六) 三月 純真女子短期大学を退職
- 平成三十年(二〇一八) 三月十八日 逝去 享年八十六歳 従四位に叙位 瑞宝小綬章を受章

研究業績目録

一・著書・訳註

- 1 秦漢思想史の研究 創文社 一九八五年一月
- 2 日本幕末以来之漢学家及其著述 台北・文史哲出版社 一九九二年五月
- 3 韓非子・孫子(『世界の名著』諸子百家) 中央公論社 一九九六年十一月
- 4 荀子(下)(『全釈漢文大系』8)(共著) 集英社 一九七四年四月

- 5 孫子（中公文庫）
中央公論社 一九七四年九月
- 6 朱子語類（『朱子学大系』6）（共著）
明德出版社 一九八一年十月
- 7 呂氏春秋（『中国の古典』）
講談社 一九八七年七月
- 8 韓非子（上・下）（中公文庫）
中央公論社 一九九〇・九二年
- 9 明治の漢学者たち
研文出版 一九九八年一月
- 10 江戸の漢学者たち
研文出版 一九九八年六月
- 11 中国古代の思想家たち
研文出版 二〇〇二年二月
- 12 明治的漢学家
台湾・学生書局 二〇〇二年十二月
- 13 呂氏春秋
講談社 二〇〇五年一月
- 14 明治の青春（明治の漢学者たち 続）
研文出版 二〇〇九年三月
- 15 松崎慊堂・安井息軒（『叢書・日本の思想家』30）（共著）
明德出版社 二〇一六年九月
- 二、編著
- 1 亀井南冥・昭陽全集（全八卷）（共編）
葦書房 一九七八、八〇年
- 2 楠本端山・碩水全集（共編）
葦書房 一九八〇年八月
- 3 伝習館文庫蔵書目録（共編）
福岡県立伝習館高等学校・同窓会 一九八四年九月
- 4 伝統文化与東亜文化（共編）
中国人民大学出版社 一九九二年五月
- 5 杵築藩関係古文書調査報告書―漢籍・日本漢詩文目録―（共編）
杵築市教育委員会 一九九二年九月

三、論文

- 1 管子幼官攷
集刊東洋学1（東北大学）
一九五九年五月
- 2 管子四篇について
文化25-1（東北大学文学会）
一九六一年三月
- 3 時令説について―管子幼官篇を中心にして―
文科紀要9（東北大学教養部）
一九六二年三月
- 4 管子の思想―外言類を中心にして―
集刊東洋学7
一九六二年五月
- 5 管子輕重篇について
日本中国学会報15（日本中国学会）
一九六三年十月
- 6 塩鉄論について その（一）
集刊東洋学13
一九六五年五月
- 7 塩鉄論について（二）
文化29-2
一九六五年八月
- 8 再び管子四篇について
東北大学教養部紀要4（東北大学教養部）
一九六六年三月
- 9 莊子における思想と文学
東方学35（東方学会）
一九六八年一月
- 10 散不足論について
集刊東洋学24
一九七〇年十月
- 11 道家思想研究史のための覚書―武内・津田両博士の業績を中心にして―
東北大学教養部紀要15（東北大学教養部）
一九七二年三月
- 12 後漢初期の社会と思想
集刊東洋学28
一九七二年十一月
- 13 前漢の道家思想について
東北大学教養部紀要19
一九七四年三月
- 14 法言について
哲学年報50周年論文集（九州大学文学部）
一九七五年三月
- 15 管子水地篇について
集刊東洋学35
一九七六年五月
- 16 漢宣期の儒教
中国哲学論集1（九州大学中国哲学研究会）
一九七六年十月
- 17 「劉向」覚書
日本中国学会報28
一九七六年十月
- 18 前漢哀帝期のこと
吉岡博士還暦記念 道教研究論文集（国書刊行会）
一九七七年五月

- 19 散不足篇の「中者」をめぐって
九州中国学会報21（九州中国学会）
一九七七年五月
- 20 太玄経について
哲学年報37（九州大学文学部）
一九七八年三月
- 21 秦の思想統制について―雲夢秦簡ノート―
中国哲学論集4
一九七八年五月
- 22 「文景」から「漢武」へ―儒教国教化への道程―
哲学年報38
一九七九年三月
- 23 雲夢秦簡「編年紀」について
九州中国学会報22
一九七九年五月
- 24 秦漢の思想統制について
哲学年報39
一九八〇年三月
- 25 「戦国末政治思想」覚書
中国哲学論集6
一九八〇年十二月
- 26 楊惲の死
九州中国学会報23
一九八一年五月
- 27 『管子』と『呂氏春秋』
中国哲学論集7
一九八一年十月
- 28 「学記」篇について
荒木教授退休記念 中国哲学史研究論集（葦書房）
一九八一年二月
- 29 秦の始皇帝について
哲学年報41
一九八二年三月
- 30 秦漢思想史への視角
中国哲学論集8
一九八二年十月
- 31 陳嬰の母
中国における人間性の探求（創文社）
一九八三年二月
- 32 天囚西村時彦覚書
哲学年報42
一九八三年三月
- 33 李斯をめぐって
中国哲学論集9
一九八三年十月
- 34 丘の禱るや久し
孔子とその時代
一九八四年五月
- 35 秦から漢へ―その二十余年のこと―
中国哲学論集10
一九八四年十月
- 36 管子修靡篇について
東洋史研究44-4（東洋史研究）
一九八六年三月
- 37 安井息軒覚書
東方学72
一九八六年七月
- 38 揚雄の賦について
中国詩人論（汲古書院）
一九八六年十月
- 39 揚雄論
中国思想史（上）（ぺりかん社）
一九八七年三月

- 40 初代長崎領事余元眉とその書翰 九州中国学会報26 一九八七年五月
- 41 後漢思想史研究のための序 東方学会創立四〇周年記念 東方学論集（東方学会） 一九八七年六月
- 42 岡松甕谷のこと 中国哲学論集13 一九八七年十月
- 43 安井息軒の『管子纂詁』について 第一屆国際漢籍會議論文集（台北・聯合報国学文献館） 一九八七年十二月
- 44 明治以降における道家思想研究史 哲学年報47 一九八八年三月
- 45 北潜日抄について 中国哲学論集特別号 一九八八年三月
- 46 棧雲峽雨日記について 第二屆国際漢籍會議論文集 一九八八年十二月
- 47 「漢文大系」について 九州大学文化史研究34（九州大学九州文化史研究所） 一九八九年三月
- 48 遠藤隆吉寛書 哲学年報49 一九九〇年三月
- 49 「漢学」二題（亀井昭陽の学問一斑、島田篁村の「與黎純齋書」について） 九州大学川添昭二氏科研報告書 一九九〇年三月
- 50 村上知行ノート 中国現代文学論集（中国書店） 一九九〇年四月
- 51 福岡の漢学 新しい漢文教育（研文社） 一九九〇年五月
- 52 関於『韓非子』的編成 中国人民大学学報91-6（中国人民大学） 一九九一年六月
- 53 西村天囚のこと 九州の漢学者たち（海鳥社） 一九九一年八月
- 54 鹽谷宕陰の六藝論 韓国中国学会31（韓国中国学会） 一九九一年八月
- 55 重野成齋其人及其学問 第五屆国際漢籍會議論文集 一九九一年十二月
- 56 東京大学「古典講習科」の人々 哲学年報51 一九九二年三月
- 57 『史記』傳斬劓成列伝 北京師範大学学報92-13（北京師範大学） 一九九二年三月
- 58 『漢籍国字解全書』について 東洋の思想と宗教9（早稲田大学東洋哲学会） 一九九二年五月
- 59 明治期的漢学 伝統文化与東亜文化（中国人民大学出版社） 一九九二年五月

- 60 『棧雲峽雨日記』與『觀光紀遊』 陳奇祿七秩榮慶論文集（台北・聯合報國學文獻館） 一九九二年五月
- 61 二三の『韓非子』注について 九州大学川勝賢亮氏科研報告書 一九九二年十二月
- 62 亀井の学問 『福岡県史』文化卷上（福岡県） 一九九三年三月
- 63 遠藤隆吉『漢文日記』について（上）——『過眼則録』第38冊—— 哲学年報52 一九九三年三月
- 64 鹽谷宕陰と中村正直 九州大学柴田篤氏科研報告書 一九九三年三月
- 65 關於岡鹿門的『觀光紀遊』 第五屆國際漢籍會議論文集 一九九三年五月
- 66 日本の考証学の特色について 清代經学國際討論會論文集（台北） 一九九四年三月
- 67 遠藤隆吉『漢文日記』について（下）——『過眼則録』第39～40冊—— 哲学年報53 一九九四年三月
- 68 「兵は詭道」をめぐって 内藤幹治退官記念 中国的人生觀・世界觀（東方書店） 一九九四年三月
- 69 明治漢学覚書 町田三郎教授退官記念 中国思想論叢（中国書店） 一九九五年三月
- 70 井上哲次郎ノート——漢学三部作を中心にして—— 中村璋八古希記念東洋学論集（汲古書院） 一九九六年一月
- 71 江戸の教学——寛政以後のこと—— 斯文104（斯文会） 一九九六年三月
- 72 林泰輔と日本漢学 東洋の思想と宗教14 一九九七年三月
- 73 安井息軒『論語集説』について 東方学会創立五十周年 東方学論集（東方学会） 一九九七年五月
- 74 海保漁村覚書 日本中国学会報49 一九九七年十月
- 75 息軒遺事——倉田幽谷『抱樸園文存』から—— 九州中国学会報36 一九九八年五月
- 76 竹添井井『紀韓京之變』について 日本中国学会創立五十年記念論文集（日本中国学会） 一九九八年十月
- 77 明治の青春——小西和の軌跡—— 純真紀要40（純真女子短期大学） 一九九九年十二月
- 78 朱舜水と黄遵憲 朱舜水与日本文化（中国人民大学出版社） 二〇〇三年七月
- 79 安井息軒の「遺言」その他 中国哲学論集30 二〇〇四年十二月

- 80 九州の漢学者たち 中国哲学論集35 二〇〇九年十二月
- 81 庄野寿人と亀陽文庫 九州中国学会報48 二〇一〇年五月

四 解説・書評他

- 1 (書評) 木村英一著『老子の新研究』 集刊東洋学2 一九五九年十二月
- 2 (書評) 竹内昭夫著『仁の古義の研究』 集刊東洋学11 一九六四年五月
- 3 (書評) 金谷治著『秦漢思想史研究』書評 関西大学国文学会 一九六五年一月
- 4 (書評) 大浜皓著『莊子の哲学』 集刊東洋学17 一九六七年五月
- 5 (書評) 藤川正數著『漢代における礼学の研究』 集刊東洋学19 一九六八年五月
- 6 心術ということば 全釈漢文大系月報(『荀子』下)(集英社) 西日本新聞 一九七四年四月
- 7 論語へのアプローチ―彌高から和楽へ― 西日本新聞 一九七四年九月
- 8 (書評) 佐川修著『春秋学論考』を読んで 東方37(東方書店) 一九八四年四月
- 9 叔孫通のこと 創文255(創文社) 一九八五年五月
- 10 豊後の三偉人 西日本新聞 一九八五年六月
- 11 針尾島の天因 懷徳54(懷徳堂堂友会) 一九八五年十二月
- 12 学則・学規・破門のことなど 九州大学図書館情報23-1(九州大学附属図書館) 一九八七年五月
- 13 (書評) 金谷治著『管子の研究―中国古代思想史の一面―』 東洋史研究47-1 一九八八年九月
- 14 「中国域外漢籍国際会議」のこと 中国哲学論集14 週刊朝日百科 世界の歴史68(朝日新聞社) 一九八八年十一月
- 15 李退溪 能古博物館だより4(能古博物館) 一九九〇年三月
- 16 亀井塾の学規 能古博物館だより4(能古博物館) 一九九〇年八月

- 17 (資料) 慶長19年林道春及五山衆試文稿 九州大学中村質氏科研報告書 一九九一年三月
- 18 国際解義情報 第五回中国域外漢籍国際会議 東洋の思想と宗教 8 一九九一年六月
- 19 前橋時代の津田左右吉 ぐんま教育 27 一九九一年六月
- 20 日本九州大学「『文心雕龍』国際学術検討会」序 文心雕龍国際学術検討会論文集(台湾・文史哲出版社) 一九九一年九月
- 21 日本の『論語』 孔子と現代(多久財団法人 孔子の里) 一九九一年十月
- 22 はじめに <第四回>九州大学―ソウル大学校中国学学術交流会議論文集 一九九一年十月
- 23 第六回「中国域外漢籍国際学術会議」に参加して 東方学 83 一九九二年一月
- 24 「温知堂蔵書」目録のこと 中国哲学論集 18 一九九二年十月
- 25 孔子学団と弟子たち 「孔子の原郷」44年展(読売新聞社) 一九九二年十月
- 26 楠本碩水と「碩水文庫」 九大学報二三一七号(九州大学) 一九九二年十二月
- 27 貝原益軒(7)(新はかた学120) 朝日新聞 一九九四年九月
- 28 亀井南冥・昭陽(1)―(5)(新はかた学121~125) 朝日新聞 一九九四年九月
- 29 貝原益軒の「春芳園牡丹記」について 中国哲学論集 20 一九九四年十月
- 30 「東アジアの伝統文化国際会議」について 東方学 89 一九九四年十二月
- 31 『論語』をどう読み進めるか 江河万里流る(亀陽文庫) 一九九四年十二月
- 32 孫子の兵法 月刊しにか 10-2(大修館書店) 一九九九年二月
- 33 追悼文 金谷治先生を偲んで 東方宗教 108(日本道教学会) 二〇〇六年十一月
- 34 九州とはなにか 九州の儒学群像 海路9(海路編集委員会) 二〇一〇年三月